

# 大子町の特徴・魅力に関する予備的考察

## －第3回フィールド調査にもとづくモノローグ－

池谷 美衣子<sup>1</sup>

### 1. はじめに

2010年度、筆者は第3回フィールド調査(以下、本調査)に参加した。本調査は大子町立さはら小学校の学校行事への参加および児童との交流を中心に企画され、これらの体験を通じて大子町の現状を理解することが目指されたものである。

本調査を通じて筆者が感じたことを端的に言えば、学校教育で強調される地域の特徴と実際に筆者が感じた地域の特徴・魅力とのズレ、「ちくはぐさ」であった。この「ちくはぐさ」を手がかりに、本稿では大子町の特徴・魅力に対する予備的考察を試みる。多くは主観的な記述にとどまるが、初年度の記録でもありモノローグとして残しておきたい。

### 2. 大子町の特徴を活かした教育活動

#### －「稲作」と「餅つき」

大子町立さはら小学校では、敷地内にある畑を利用した野菜の生産販売活動(「夢道場」)のほかに、春から秋にかけて近隣の田んぼを利用した稲作活動が行われている。筆者が参加した「親子ふれあいの集い」は、多くの保護者の協力のもとでおこなわれる収穫したもち米を使った全校児童による餅つきを主にした学校行事であり、稲作体験の集大成となっている。

10月後半から11月前半にかけて大子町立のすべての小学校で保護者が参観・参加する学校行事(以下、秋の学校行事)が実施されており、さはら小学校の「親子ふれあいの集い」はこのうちのひとつである(表1)。

表1によると、秋の学校行事に「餅つき」を取り入れている小学校は7校中6校、かつ児童が育成・収穫したもち米を用いて「餅つき」を実施している小学校が6校中4校であった<sup>1)</sup>。ここから、大子町内の小学校においては「餅つき」が教育活動として定番化しており、「稲作」についても積極的に取り組まれていることがわかる。さはら小学校での「親子ふれあいの集い」に対し、大子町教育委員会学校教育課は「大子町では当たり前」だが「他の地域と比較すれば、とても特色のある教育活動である」と評した<sup>2)</sup>。このような評価の背景には、大子町内小学校において教育活動として「餅つき」「稲作」が広がっていることがあるのだろう。したがって、次に整理する「餅つき」「稲作」に対する筆者の関心・疑問もまた、単にさはら小学校に限らず町内小学校にある程度共通している可能性があるものと考えられる。

「親子ふれあいの集い」では、筆者が見た限りにおいて、ほとんどの児童が学年ごとに順番を待ち、数回杵で餅を搗いて次の児童に交代していた。もち米を臼に移した最初の「こね」や「返し」はもちろん、搗きあがった餅を丸めたり

表1 大子町立小学校における2010年秋の学校行事

小学校名	行事名	日程	餅つき	稲作
1 さはら小学校	親子ふれあいの集い	11月9日	○	○
2 依上小学校	収穫祭	11月6日	○	○
3 袋田小学校	収穫祭	11月3日	○	○
4 生瀬小学校	やまびこ祭	11月6日	○	○
5 上小川小学校	やまびこ祭	11月11日	○	—
6 黒沢小学校	収穫祭	10月30日	○	—
7 だいが小学校	感謝の集い※	10月20日	—	—

※「感謝の集い」として、児童による演奏発表が紹介されている。

(大子町教育ポータルサイトの各「小学校だより」掲載記事をもとに筆者作成)

<sup>1</sup> 筑波大学大学院 博士後期課程3年

したりする作業にはどの学年の児童もほとんど参加しておらず、大半は保護者によっておこなわれていた。もちろん、危機管理や衛生管理などの観点からは児童の参加にさまざまな制約が生じることは理解できる。また、学校行事として長い歴史があるだけに、保護者と児童間の分担や児童間の学年による役割分担が定着し固定化していると考えられる。しかし、生米から餅を完成させるまでの過程をどれだけの児童が体感したのだろうか。汗をかくほど杵をふるった児童がどれだけいたのだろうか。素朴な感想として、筆者の目には多くの児童にとって「餅つき」体験が数回杵をふるうことで終了しているように映った。「餅つき」を学校行事ではなく個々の児童の体験として捉えたと、「餅つき」は体を動かすという意味での体験にとどまっておらず、児童が本気になったり考えたりすることには必ずしもつながっていないように思われた。

また、学校の教育活動とは別に、家庭や親族、地域の中で児童が「餅つき」をする機会がどの程度あるのかということについて関心をもった。「親子ふれあいの集い」の翌日に行われた「佐原地区産業文化祭」でも（特に児童向けで実施されたわけではないが）「餅つき」が行われていた。筆者自身、子どもの頃には毎年年末に親戚一同が集まって「餅つき」をするのが恒例であった。年中行事を含んだ児童の日常における「餅つき」の機会の多寡は、学校で行われる「餅つき」体験の教育的意味を解明する上で必要な観点である<sup>3)</sup>。大子町において「稲作」や「餅つき」体験は、児童の日常から失われているからこそ、学校という教育空間に意図的に組み込まれているのであろうか。あるいは、児童の生活に身近であるからこそ、地域の特色を活かした活動として学校行事に組み込まれているのであろうか。学校行事を通じた児童の体験的学習を検討するためには、学校内だけでなく同時に学校外における児童の生活実態を射程に収める必要性を感じた。

さらに、約半年間の「稲作」と収穫したもち米による「餅つき」を組み合わせた学校行事は他地域でも散見されるものであり、しかも農村

地域に限らない。卑近な例では、つくば市内でも並木小学校・桜南小学校の各5年生による「稲作」および「餅つき」が共同実施されている<sup>4)</sup>。つくば市と大子町は地域環境において大きく異なるはずである。しかし、ほぼ同様の内容で学校行事が行われ、「地域の特色を活かした教育活動」と評価されている。これを踏まえると、「稲作」や「餅つき」は本当に大子町の「地域の特色を活かした」ものといえるのだろうか。「地域の特色を活かした学校づくり」はそれ自体が大きな課題であるが、筆者は小学校での「稲作」「餅つき」活動が特に説明を付されることもないまま大子町における「地域の特色を活かした」ものとされることに対して、若干の違和感をもちた。

### 3. 「何にもないけど何でもある町」が含意するもの

それでは、筆者は本調査を通じて何を大子町の特色ないし魅力として感じたのか。主観的な記述になるが、偶発的な出会いも含めて整理したい。個人的に最も印象に残ったのは、ログハウスのカフェ「遊森歩（ユーモア）」であった。「遊森歩」は奥久慈パノラマ林道沿いの山の中に位置し、町職員であったオーナーが約10年をかけて建築した2棟目のログハウスに設けられたカフェである。本調査での訪問時にオーナーから直接お話を伺うことができた。そこでは、ログハウスを作るための材木の切り出しから自分でおこなったこと、在職中から将来カフェを開くために小物等を収集していたこと、また3棟目のログハウスを建てる計画（夢）があることなどが語られた。筆者にとって、「遊森歩」の立地環境や店内の薪ストーブの魅力もさることながら、町職員としての仕事をしつつ（すなわち現役引退後ではなく）自分の好きな世界を時間をかけて（そしてお金はあまりかけずに）こつこつと築いていくというオーナーの生き方・暮らし方は、やはり都市部では難しい別の「豊かさ」として魅力的に映った。また、指導主事の清水洋太郎氏の自宅を訪問した際には、清水氏自身が裏山に建てた山小屋や露天風呂を案内していただいたことも印象的であった。筆者が

表2 異なる地域における問題・課題と「資源」・「魅力」

	問題・課題	「資源」・「魅力」
A. 大都市型 (中心部-郊外)	格差、社会的排除、失業 (←生産過剰) コミュニティの不在、孤独 劣悪な景観、自然の不在 過労、ストレス 長い通勤距離(←スプロール化) 劣悪な住環境	経済活力 文化やファッション 情報、知識
B. 地方都市型 (人口数万~数十 万程度)	中心部空洞化 製造業(工業)の衰退 景観破壊や虫食いの開発	ゆとりある空間や働き方 比較的広い住空間 一定のコミュニティ的紐帯 自然との近さ
C. 農村地域型	人口減少(～限界集落) 若者流出、高齢化 雇用減少、経済衰退	自然 食料等の資源 ゆっくりと流れる時間

(広井良則『コミュニティを問いなおすつながり・都市・日本社会の未来』  
筑摩書房、2009年、p.108より転載)

発見したことは、大子町には仕事ではなく趣味(余暇)として建物などを自分でつくっている地域住民がいて、かつそれぞれの目的や用途、費やすことができる時間やもちうる技術などに応じて実に自由に個性的な建物づくりを楽しんでいるということである。換言すれば、本調査を通じて筆者は消費ではなく生産を中心とした暮らし方の一端を具体的に垣間見たのではないかと思う(余談だが、本調査の2週間後、筆者はカフェ「遊森歩」を目当てにプライベートで大子町を再訪し、「月待ちの滝(再訪)」と「姫ヶ滝りんご園」を訪れている)。

清水氏は、大子町を「何もないけど何でもある町」と表現した。表2に即して整理すると、大子町にないものは「経済活力」「文化やファッション」「情報、知識」など大都市型地域の資源・魅力であり、大子町にあるものとは「自然」「食料等の資源」「ゆっくりと流れる時間」となる。この結論は概ね妥当であろう。筆者が魅力的に感じた生産を中心とした暮らしも、このような大子町の地域特性を基盤にするものであった。

一方で、自然や時間があるだけで農村地域が魅力的になるわけではない。耕作放棄地や里山の荒廃に鑑みれば、自然は地域の人口減少や経済衰退の象徴・脅威になりうるし、ゆっくりと

流れる時間は刺激の少ない生活の単調さ・平凡さに容易に転化する。大子町についても、地域住民が皆生産を中心とした暮らしをしているわけではないことに鑑みれば、地域環境は生産を中心とした暮らしを可能にする要因の一つに過ぎない。自然や時間はただあるだけでは魅力にならず、それをどう使うか、という問題がついてまわる。清水氏の「何にもないけど何でもある町」という表現を借りるならば、大子町での暮らしを「何にもない町」から「何でもある町」に転換するための“力量”ないし“仕組み”とは何か、という課題が指摘される。

『『田舎での豊かさ』とは、提供されるものではなく、自分で発見し、つくっていくもの。あくせく稼いで、文化を買おうとする都会と違って、自分でこつこつと『つくっていく文化』である。したがって、常に感性やセンスをみがき、他人の真似をしなくとも、自分で生きがいやさがせる人、生活を創造する力を持っている人でないと、田舎では楽しく暮らせない<sup>5)</sup>。既往のように、本調査を通じて筆者が感じた大子町の魅力は生産を中心とした暮らしであったが、より厳密には、生産を中心とした暮らしを楽しみながら作り出す力量をもった「個性的な地域住民」ということになろう。そして、そのよう

な力量をもった住民が個々に存在するだけでなく相互につながっていくことが、「何にもない町」を「何でもある町」へと転換する大きな“仕組み”として仮説的にイメージされる。

本調査を通じて、大子町では偶発的に「個性的な地域住民」に出会った。彼ら「個性的な地域住民」はどのように「つくっていく文化」を身につけてきたのだろうか。さらに、このような地域住民は相互にどのようにつながっているのだろうか。住民をつなげる／住民がつながる大きな“仕組み”として、大子町には具体的に何があるのだろうか。いずれも本調査を通じて見えてきた課題である。

#### 4. まとめと課題

米を作ることも餅を搗くことも、「作っていく文化」を体現するものの一つであり「生活を創造する力」を育成する一端にはなりえよう。しかし、筆者の見た限り、大子町の地域の特色を活かした小学校での「餅つき」活動は、児童にとっては体を動かすという受動的な体験にとどまっていた。そのような児童の様子と、筆者が感じた大子町の魅力—「つくっていく文化」を身につけ楽しみながら暮らしている個性的な地域住民—に対して、筆者は「ちぐはぐさ」を感じたのであった。

筆者が魅力的に感じた「何もない町」を「何でもある町」に転換するための地域住民の“力量”および地域内の“仕組み”について実態を説明していくためには、何よりもまず大子町の地域住民と対話を重ねることから始める必要がある。地域住民との対話は、本調査だけでなく

2010年度の3回の調査を通じてほとんどできていない。今後の課題として指摘しておきたい。

#### 注

<sup>1)</sup> ただし、表1はあくまでもポータルサイトの掲載記事に依拠しており、記事において言及のないことがそのまま不実施を意味するとはいえない。表1を確定するためには上小川・黒沢・だいごの各小学校に対する確認調査が必要である。

<sup>2)</sup> さはら小学校「親子ふれあいの集い」紹介の記事（2010年11月7日付、大子町教育委員会学校教育課HP、<http://www.daigo.ed.jp/kyoiku-ka/>、2011年3月1日取得）。ただし、指導主事の清水洋太郎氏はさはら小学校の活動をモデル化して他の小学校に広めたいという趣旨の発言をされていることから、さはら小学校の活動は他の小学校の活動にない特性を有しているのかもしれない。

<sup>3)</sup> 現在、「親子ふれあいの集い」の教育目的は「親子のきずなを深め、勤労の意義や尊さ、協力することの大切さなどを自覚させる」となっている（「親子ふれあいの集い実施計画書」、現地収集資料）。

<sup>4)</sup> 「教育広報つくばの学び舎（第3号）」掲載記事より（つくば市教育委員会、2011年2月14日発行）。なお、両小学校の卒業生は同じ並木中学校に通学するため、本行事には保護者を含めた共通体験の創出が意図されていると考えられる。

<sup>5)</sup> 菅野典雄（福島県飯館村長）「男からのラブレター」1996年（本稿での引用は、島田修一・辻浩編『自治体の自立と社会教育—住民と職員の学びが拓くもの—』ミネルヴァ書房、2008年、p.53からの転記）。